

# バックアウト・ムービーズ 私をKOで打ちのめした映画

Round 8

## シドニー・ルメットと 『12人の怒れる男』(1957)

「彼に比べたら、私はただのベイビーだよ」74才のクリント・イーストウッドがバルコニー席に家族と共に座る81才のシドニー・ルメット監督を見上げて言ったのは2005年のアカデミー賞会場。名誉賞を授賞した大御所ルメットの前では、確かにクリントも若きベイビー

32才のデビュー作『12人の怒れる男』のオープニングは、ギリシャの神殿ばりの立派な柱が並ぶNYの裁判所。建物の上部左から右端まで全体に渡り刻まれているのは "The True Administration of Justice is the Firmest Pillar of Good Government 真の司法権は良き政府の強固な柱" というジョージ・ワシントンの言葉。少年被告の死刑か否かを裁く陪審員の物語。イタリア系っぽい少年は「サッコとヴァンゼッティ不当裁判」を喚起させる。頬杖をつく怠惰な裁判官や全員白人男性の12人の陪審員は正義の不在を象徴。赤狩りの大被害者、リー・J・コップに重要な役を配し、法を悪用する体制に挑む。

主人公役のヘンリー・フォンダ以外の11人は、2種類に大別できる：

- 1) 地元執着型：無知、無教養、悪いマナー、人種差別者
- 2) エリートビジネス型：冷たい、自分が賢いと信じる石頭

「無知は偏見の元」「偏見は真実を嘘に変える」…14才で初めて観た当時、周囲の大人が幼稚で傲慢な理由が分かった「正義は孤独」「体制側は非正義」と納得。「多数派は常に間違っている。多数派に属しちゃいかん」はマーク・トウェインの言葉。

18才の時、浅草東宝で黒澤明の『野良犬』(1949)を観て『12人の怒れる男』での同じ設定に気づいた。「画面内の蒸し暑さが観客に伝わる2大作品」だ。『野良犬』では、志村喬が「雨になりそうだ」と数分間に2度言って土砂降りに。『12人』でもやはり2度のセリフに続き大雨。雨が役を果たすのが両作品。黒澤の影響を受けた映画は数知れないが、逆もある。『12人』のラストで雨が止み、太陽が差すのを黒澤の脚本遺作『雨あがる』が逆輸入。「雨があがってさわやかな気持ちに」が黒澤さんの希望だった。これは推測に過ぎないが、ジョン・フォードやキャロル・リード作品からヒントを得たシーンが黒澤作品に時々見受けられることから、充分可能性はある。



▲ 左はアル・パチーノ

若い頃に母親を亡くしたルメット作品は「正義は命、非正義は死」を掲げ『セルビコ』(1973)のような道徳家は非道徳社会からの猛攻を受ける。まったく知られてない傑作は『丘』(1965)

『評決』(1982)等の法廷の場面で脱力感豊かに映し出されるのは、思考をストップし、退化した人々(陪審員)の顔ぶれ。強烈な面々に「よくぞここまで集めた!」と感嘆。2009年に裁判員制度を導入した日本では「(負担だから)イヤだ」が85%。約30%が無断欠席。ルメットは陪審員の質を問うが、日本では出席さえしないからカメラも追えない。

監督たちの遺作は、因縁ものが多い。ルメットが招待された2007年トロント映画祭で上映された遺作は『Before the Devil Knows You're Dead』。ワルシャワ移民の父親に育てられた「怒れる正義の男」は、2011年4月、86才で亡くなった。2ヶ月後のリンカーンセンターでの回顧展ではローレン・バコール、グレン・クローズ等の大物が続々と登壇。『セルビコ』を演じたアル・パチーノが言った「もっとも進化した人間で、とっても優しい人だった」

(Lucky Day)

© Vancouver Shinpo